

日伊の母子におけるスキンシップ（身体接触）の あり方

—子どもの加齢にともなう量的変化の検討—

坂上裕子¹⁾ ・ 関エレナ²⁾

1) 青山学院大学教育人間科学部心理学科

2) 青山学院大学教育人間科学部心理学科卒業生

Skinship (physical contact) between mothers and children in Japan and Italy

- Examination of quantitative changes with the age of the child -

Hiroko SAKAGAMI ・ Elena SEKI

Department of Psychology
College of Education, Psychology and Human Studies
Aoyama Gakuin University

Abstract

Comparative cultural studies of physical contact suggest that in Japan, intimate physical contact between parents and children occurs frequently when children are young, but declines after a certain age. However, there is no consensus on the age at which physical contact begins to decline. In this study, we examined the quantitative changes in skin-to-skin contact between mothers and their children (16 types of physical contact behavior), with a comparison between Japan and Italy. The results showed that the pattern of decrease in frequency varied by behavior. In contrast to Italian mothers and their children who maintain physical contact such as kissing, hugging and linking arms, Japanese mothers and their children rarely engage in physical contact once their children reach high school age or older. In the future, we need to explore the culture-specific ideas about skinship, child development, and parent-child relationships that underlie changes in the frequency of behaviors.

Key Words: skinship, physical contact, mother and child, Japan and Italy

問題と目的

親子間における身体接触の意義 生まれたばかりの子どもと養育者の交流は、身体接触から始まる。子どもの心身が健全に発達するためには母子間の身体接触が不可欠であることを実証的に示したのは、アメリカの心理学者のハーロウであった (Harlow, 1963)。ハーロウは、赤毛ザルの子ども

を対象に代理母を用いた実験を行い、子どもが母親に愛情反応（長い時間くっついていて、脅かされた時に接触を求めるなど）を示すようになるには、飢えや渇きなどの一次的欲求を満たしてもらうことよりも、接触による心地よさを得られることの方が重要であると主張した。また、ハーロウと同時代に活躍した児童精神科医のボウルビー

(Bowlby, 1969) は、親子の関係性の形成過程や親子の関係性が人のパーソナリティや社会的適応に及ぼす影響を体系的に論じたアタッチメント理論を提唱した。その中で彼は、ヒトの子どもには生存のために養育者への近接を求め、維持しようとする生物学的な傾性、すなわち、アタッチメントシステムが備わっており、乳児が養育者に向ける微笑みや泣き、後追いやしがみつきといった一連の行動には、養育者との近接を保つという共通の機能があると考えた。同時に、養育者の側には、子どもが危険な状態にあると知覚した時には子どもに近接し、子どもを慰め、保護しようとする養育システムが備わっている、と考えた。子のアタッチメントシステムと親の養育システムは相互的に作動するのが理想的であり、子のアタッチメントの要求に対して養育者が応答的である場合、子どもは養育者を安全の拠り所として安心して探索活動を行うことが可能となり、それによって子どもの学習の促進と心身の健やかな発達が保障されるとボウルビーは考えたのである。アタッチメントについてはその後、エインズワース (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) らをはじめ、アメリカやイギリス、ドイツ、オランダを中心にさまざまな国の研究者によって理論の検証と精緻化が重ねられるとともに、親子の関係性の形成基盤となる“attach”という行為、すなわち、「くっつく」ことに代表される親子間の身体接触の意義が認識されるようになった。

アタッチメント理論が登場する前の時代のアメリカでは、子どもへの身体接触は推奨されていなかったことが当時の育児書に記されているが (Gregory, 2011) が、その後、アタッチメント理論の普及とともに、欧米では育児や保育に関わる人たちの間で親子間の身体接触の重要性が認識、共有されていった。2000年代に入ってから、身体接触にともなう生理化学的反応の解明が進み、身体接触がオキシトシン (社会的行動や他者との関係形成を促す働きをもつホルモン) の分泌を促すことが明らかとなり (たとえば Feldman, Gordon, & Zagoory-Sharon, 2010)、今日では親子関係を含む社会的関係の形成や維持における身体接触の意義がますます強調されるようになっていく。

スキンシップとは 欧米ではアタッチメント理論の登場を契機に、親子関係の形成における身体接触の意義が認識されるようになったが、翻って日本では、欧米とはやや異なる経緯で身体接触の重要性が認識、共有されていったようである。その際に大きな貢献を果たしたと思われるのが、スキンシップという言葉の普及である。

日本人の多くに馴染みがあるであろう、スキンシップという言葉は、実のところ、日本で造られた和製英語である。田中 (1997) によれば、スキンシップは、1958 年版の『現代用語の基礎知識』 (自由国民社, 1958) という事典に、「各界の最新語」として家事の項に初めて現れた言葉であり、そこには「(スキンシップとは) 皮膚関係という新造語であり、接触関係を通じなければ、母親の愛情を子どもに伝えることができないことを意味した言葉。アメリカで強調されている。わが国では、スキンシップが多すぎて、子どもから独立心を奪っている傾向が強い」という説明が付されている。その後、『現代用語の基礎知識』には、児童・青年精神医学および保育学を専門とする平井信義氏が担当する育児語として、スキンシップという言葉が継続して掲載されている。ただし、そこでの記述内容は時代とともに変化しており、1972 年版には「わが国では、おんぶや添い寝などスキンシップが多すぎるものが心配されていたが、最近ではスキンシップの少ない母親がふえている。そのために、母親の愛情を知らず、異常行動を現す子どももふえている。」とスキンシップの様相が変化してきた旨が述べられている (ただし、実際にスキンシップが少ない母親がこの時期にふえていたのかに関しては、真偽のほどは不明である)。また、1982 年版では「(スキンシップの) 方法は年代によって異なるが、思春期に入るまで必要である。」という説明が加えられている (いずれも、田中 (1997) より間接引用)。

事典類に掲載されているスキンシップに関する最新の説明は、日本大百科全書デジタル版 (小学館, 2022) の平井信義によるものである。一部を引用すると、「幼児期とくに3歳未満の子供には、抱く、背負うなどの身体接触が、子供の情緒の安定に役立ち、子供がからだで甘えたときに、それ

を受け入れてくれる相手（とくに母親）との間に緊密な情緒的関係が成立し、それが信頼関係となる。つまり、母親の温かいイメージが子供の心に刻み込まれ、これが、子供に不安が生じたときの心の基地になる。スキンシップの不足による情緒の不安定は、さまざまな異常行動を生み出す。たとえば攻撃的行動や各種の癖などとなって現れたり、無気力になったり、表情が固くなったりする。そのような子供の治療にはスキンシップがきわめてよい効果を現し、それは学童期の子供についても、思春期以後の子供についてもいえる。ただし、子供がスキンシップを求めているときに抱くようなことが多いと抱き癖がつくことがある。また、親自身がスキンシップを楽しめないときには、なかなか子供の情緒の安定は実現できない。スキンシップにも親子ともに楽しいという状況が必要になる。わが国の添い寝もスキンシップの点から大きな意味がある。」とある。このように、平井による最新の説明では、アタッチメント理論を踏襲した内容や、身体接触が子どもの情緒の安定に寄与しうるための条件が加筆されている。

身体接触における文化差 上述した事典類におけるスキンシップに関する記述内容およびその変遷からは、①身体接触に関する考え方や捉え方は時代とともに変化してきたが、現在では、親子関係の形成における身体接触の意義が、文化によらず重要視されていること、また、②身体接触に関する考えや捉え方、頻度には文化によって違いがあることがうかがわれる。①については本論文の冒頭で既述したとおりであるので、ここからは②の文化差について述べる。

身体接触は人間にとって基本的なコミュニケーションの方法であるが、それぞれの文化には、身体接触をしてもよい相手や場面、身体部位に関して固有のルールがあり、人は成長するにつれ、その文化の身体接触のルールを身につけ、守るようになる（バーンランド、1979）。では、他者との身体接触において日本にはどのような特徴があるのだろうか。比較文化研究によれば、日本人の身体接触の量は他国の人に比べて少なく、ゆえに日本は非接触文化であるとされている（Tahhan, 2010; 高田・長江, 2012に概観）。一方、イタリア、

フランス、スペインなどの南ヨーロッパや、ラテンアメリカ、中東やアフリカの人々は、公衆の前でも触れ合うことが多いと言われている（鍋倉, 2009）。

ただし、こうした研究で対象とされているのは主として成人であり、日本人は身体接触が少ないという指摘は、子どもには当てはまらないようである。幼い子どもとの身体接触の代表といえ、おんぶや抱っこであるが、柴崎（1998）によれば、おんぶは鎌倉・室町時代には既に行われていたらしく、おぶうという習慣は江戸時代には定着していたとされる。幕末や明治初期に来日した欧米人が日本で見聞したものを綴った手紙や日記には、母親や子守が常に子どもを抱いたり負ぶったりしている様子や大人が子どもと一緒に遊ぶ様子が描かれ、子どもが大切に扱われていることへの賞賛が綴られている（中江, 2003）。また、発達心理学の領域では、Caudill & Weinstein（1969）による日米の比較研究がよく知られており、乳児との相互作用において日本の母親は、アメリカの母親に比べて子どもへの言語的な働きかけは少ない一方で、接触時間は長いことが示されている。

このように幼少期に限ってみれば、日本人の身体接触は必ずしも少ないとは言えないのであるが、では、どのあたりの年代から身体接触が減少するのであろうか。これについては、日米ともに幼児のときは親密さの高い身体接触があるものの、それ以降も身体接触が維持されるアメリカとは対照的に、日本では児童期以降、身体的親密さが急激に減少する（バーンランド, 1979）という指摘がある。また、日本では5、6歳ごろになると触覚によるコミュニケーションが一切なくなり、根本的に断絶してしまう（Gregory, 2011）と指摘する研究者もいる。さらに、国内の調査研究からは、青年期以降に家族間での身体接触量が減少することが示唆されており（土蔵, 1988）、身体接触が減少する年代をめぐることは、さまざまな見解がある。

本研究の目的 身体接触に関する比較文化研究からは、日本では子どもが幼少のうちは親子の間で親密な身体接触が行われているものの、ある年代を過ぎるとあまり行われなくなることが示唆さ

Table 1 調査協力者の基本情報

日本			イタリア		
子年齢	性別	きょうだいの有無	子年齢	性別	きょうだいの有無
21	女	兄, 弟	25	男	ひとりっこ
21	女	妹	22	女	兄
21	女	妹	23	女	兄、兄、兄
21	女	兄	23	女	姉
19	男	妹	23	女	ひとりっこ
20	男	弟, 妹	22	女	兄
20	女	兄	22	女	姉, 兄
19	男	妹	23	男	姉, 姉
20	女	兄	19	男	弟, 妹, 妹
20	女	ひとりっこ	22	女	姉, 兄, 弟
22	男	弟	19	女	姉
22	女	兄	22	女	兄, 姉, 弟
21	女	姉	25	男	兄
21	男	姉	20	女	姉

れている。ただし、どの年代から身体接触が減少するのかについては、一致した見解が得られていない。そこで本研究では、母子間のスキンシップ、すなわち身体接触が子どもの年齢とともにどのように変化していくのかを、身体接触という点で日本の対極にあるとされるイタリアとの比較を交えて検討する。さらに、母子間の身体接触の変化にどのような要因が関与しているのかを、母親へのインタビュー調査を通して明らかにすることを試みる。

昨今の日本では、地縁や血縁の希薄化によって子育ての方法が伝承されづらくなり、抱っこやおんぶ、遊びを含む子どもとの接触の仕方や子どもへの関わり方が分からない、という不安の声が親たちから聞かれる。また、子育て支援の現場からは、抱っこやおんぶを含む子どもへの関わり方にぎこちなさをもつ親が増えていることを懸念する声が聞かれ、最近では日本各地で、抱っこやおんぶの仕方を学ぶ講座が開かれている。本研究の調査協力者は、子どもが既に成人年齢に達している、あるいは成人間近の年齢の子どもを持つ母親であり、現在子育て中の親世代よりも少し上の世代の人たちにあたる。その世代の母親たちが、自身の子育て経験を通してスキンシップをどのように捉えてきたかを知ることが、母子間の身体接触をめ

ぐる現在の懸念や問題を解決するための糸口を見出すための一助にもなると思われる。

本研究の第一報では、日本とイタリア、各国の母親がどのような行動をスキンシップにあたると考えているのか、また、それらの行動の頻度は子どもの加齢にともないどのように変化してきたのかの二点について、母親へのインタビューと質問紙調査で得られた量的データの分析を通して検討する。

方法

日本の母親とイタリアの母親を対象に、インタビュー調査および質問紙調査を実施した。詳細を以下に記す。

調査協力者 大学生の子どもを持つ日本の母親14名（平均年齢51.4歳（SD = 3.79）、子どもの平均年齢は20.6歳（SD = 0.94）、性別は女9名、男5名）と、イタリアの母親14名（平均年齢54.4歳（SD = 4.85）、子どもの平均年齢は22.1歳（SD = 1.83）、性別は女10名、男4名）であった（Table 1）。協力者は、第二著者の知人の母親ならびに縁故法で協力に応じた大学生の母親であった。

調査実施時期 インタビュー調査については、イタリアの母親には2017年8月上旬～下旬に、日本の母親には10月中旬～12月上旬に実施した。

また、質問紙調査には、2017年12月下旬から2018年1月上旬に実施した。

インタビュー調査 予め用意したインタビューガイドに沿って、協力者と一対一の対面でインタビューを実施した。日本の母親には、第二著者が日本語でインタビューを行った。また、イタリアの母親には、イタリア語がネイティブレベルである第二著者が、イタリア語でインタビューを行った。インタビューは、イタリアでは全員協力者の自宅で、また、日本では協力者の自宅、または大学内の研究室にて実施した。また、インタビューは協力者の了承を得た上で録音した。

インタビューでは、スキンシップを含む子どもへの関わり方や、スキンシップをしている時の気持ち、スキンシップに関する考えなど、スキンシップに関するさまざまなことがらを母親に尋ねたが、ここでは、本稿で扱う質問項目のみを記す。

まず、協力者の基本的情報（母親の年齢、子どもの年齢と性別、出生順位）を尋ねた後、著者らがスキンシップにあたると思った16の行動（Table 2を参照）を書いた16枚のカードを協力者に提示したうえで、スキンシップにあたると思うカードを選定してもらった。なお、16の行動のうち6つ（手を繋ぐ・頭をなでる・添い寝をする・頬ずりをする・キスをする・おんぶする）は、山口（2003）の身体接触調査票で得点が高かった行動である。また、2つ（話しかける・視線を合わせる）は、佐野・荻野（1990）の調査で、スキンシップと考えられる行動として得点が高かった行動にあたる。残りの8つ（抱っこする・膝に乗せる・腕を組む・髪を結ぶ・抱きしめる・手遊びをする・子どもが親にマッサージをする・お風呂で背中を流してもらう）は、第一著者のゼミに所属する大学生10名によるブレインストーミングの結果、スキンシップにあたる行動として挙げられたものである。あわせて母親には、上記の16の行動以外に、子どもとってきたスキンシップの行動や関わり方があるかを尋ねた。

なお、問題と目的で述べたとおり、スキンシップという言葉は和製英語であり、スキンシップという言葉を知っている人はイタリアの母親ではいなかった。そのため、イタリアの母親への調査に

際しては、スキンシップを「母子間における身体接触（*contatto fisico tra madre e figlio*）」というイタリア語に翻訳し、事前に説明を行ったうえで、インタビューを行った。

質問紙調査 インタビュー調査に協力した全員の母親（28名）に、2017年12月下旬～翌年1月上旬の間に、スキンシップの頻度を問う質問紙に回答してもらった。子どもが0～5歳のとき、子どもが小学生のとき、子どもが中学生のとき、子どもが高校生のとき～現在の4つの各年代において、上記の16の行動（1. 手を繋ぐ、2. 頭を撫でる、3. 添い寝をする、4. 頬ずりをする、5. キスをする、6. おんぶする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる、9. 抱っこする、10. 膝に乗せる、11. 腕を組む、12. 髪を結ぶ、13. 抱きしめる、14. 手遊びをする、15. 子どもが親にマッサージをする、16. 背中を流してもらう）をどの程度とることがあったかを、「全くなかった」「まれにあった」「時々あった」「よくあった」の4件法で回答するよう求めた。

倫理的配慮 調査への参加は任意であり、回答への拒否や中断が可能であること、調査によって得られた情報は研究以外の目的で使用しないこと、インタビューの発話を引用する場合には個人が特定されないようにすること、録音データを含む個人情報の扱いには十分留意することを協力者に説明し、同意を得たうえで調査を実施した。

結果と考察

本研究では、先行研究の知見等をもとに、著者らがスキンシップにあたる想定した16の行動を協力者に提示し、回答を求めることとした。ただし、日本の母親とイタリアの母親とでは、どのような行動をスキンシップと捉えているのかがそもそも異なる可能性が考えられた。そこで、まず、各国の母親がどのような行動をスキンシップとして認識しているのかを把握したうえで、提示した16の行動を各国の母親がどのくらいの頻度でとってきたのかを、日本とイタリアの違いに着目しながら検討する。

スキンシップだと思ふ行動 各国の母親に、16の行動の中からスキンシップにあたると思う行動を選択してもらったところ、Table 2に示すよう

Table 2 当該の行動がスキンシップ
にあたると回答した母親の人数

行動	日本	イタリア
	N (%)	N (%)
1. 手を繋ぐ	14 (100.0)	14 (100.0)
2. 頭を撫でる	14 (100.0)	14 (100.0)
3. 添い寝をする	14 (100.0)	12 (85.7)
4. 頬ずりをする	14 (100.0)	14 (100.0)
5. キスをする	13 (92.9)	14 (100.0)
6. おんぶする	13 (92.9)	10 (71.4)
7. 話しかける	6 (42.9)	11 (78.6)
8. 視線を合わせる	6 (42.9)	11 (78.6)
9. 抱っこする	13 (92.9)	14 (100.0)
10. 膝に乗せる	13 (92.9)	14 (100.0)
11. 腕を組む	13 (92.9)	14 (100.0)
12. 髪を結ぶ	12 (85.7)	10 (71.4)
13. 抱きしめる	13 (92.9)	14 (100.0)
14. 手遊びをする	8 (57.1)	13 (92.9)
15. 子どもが親に マッサージをする	13 (92.9)	7 (50.0)
16. お風呂で背中を 流してもらう	10 (71.4)	7 (50.0)

な結果が得られた。Table 2 は、当該の行動がスキンシップにあたると考えた母親の人数を示したものである。

スキンシップにあたる行動として16の行動全てを選択した母親は、日本では5名（35.7%）、またイタリアでも5名（35.7%）いた。16の行動のうち約4分の3の行動については、8割以上の母親がスキンシップにあたと認識していた。その一方で、スキンシップにあたと認識していた母親が半数に達していない行動もあった。日本の母親では「7. 話しかける」「8. 視線を合わせる」がこれに該当する。インタビューでの母親の語りからその理由を探してみると、日本ではこれらの行動について、「日常生活である当然なことなのでスキンシップでない。日本人だとねー、私はスキンシップという、特別に何かするようなことに考えてしまっていて…」 「これ、当たり前だと思っちゃうんだよねー。これはもう当然」といった内容の

語りがみられた。ここから推察するに、話しかける、視線を合わせるといった行動は、母親たちが普段意識することなく日常的に取っている行動であるがゆえに、あえてスキンシップとは認識されていないのではないかと考えられた。一方、イタリアでは、「15. 子どもが親にマッサージをする」「16. 背中を流してもらう」の2つが、スキンシップと認識している母親が半数以下であった行動にあたる。これら2つの行動に「おんぶする」を加えた3つの行動については、「自分がやってこなかったからスキンシップではない」という語りが、これらの行動をスキンシップとは捉えていなかった母親全員にみられた。イタリアの母親では、自分がその行動をしたことがあるか否かが、その行動がスキンシップにあたるか否かを判断する基準になっていたのではないかと推察される。

また、母親の語りからは、いくつかの行動については日本の母親とイタリアの母親とで若干異なる

る内容が連想されていたことが分かった。その一つが、「3. 添い寝をする」である。日本人では、添い寝という言葉に対して、「ベッドで一緒に寝る」「同じ布団に入る」といった行動が連想されていたのに対して、イタリア人では、「ソファで横になる」「ベッドで物語を読んであげる」など、横にいて寝転がる、という行動が連想されていた。日本には、子どもが小さいうちは親と同室同床で寝る習慣がある。しかし、イタリアにはそうした習慣はなく、子どもは通常、小さいうちから親と離れて1人で就寝する。就寝に関するこのような習慣の違いから、添い寝という言葉によって連想される行動に違いがみられたものと思われる。また、「5. キスをする」についても、日本とイタリアとでは若干異なる内容が連想されていた。日本の母親では、「これって口にするわけ？」「え？口じゃなくてもいいなら、少しはあるけど」といった語りにみられるように、キスは口にするものであると認識している母親がいたが、イタリアの母親では、キスは頬に軽く唇が触れる程度のものとして認識されていた。さらに、「6. おんぶする」については、イタリアにはそうした行動の習慣がないためにおんぶを表す適切な単語がなく、インタビューの際にはインタビュワーが「子どもを背中に乗せる」と翻訳して伝えていた。そのため、日本語でいうおんぶとは異なる行動が連想されていた可能性がある。

国別、子どもの年代別にみたスキンシップ行動の頻度 次に、スキンシップ行動の頻度に関する分析の結果を示す。

16の行動について、母親がその行動をとることが「よくあった」と回答した場合を4点、「時々あった」と回答した場合を3点、「まれにあった」と回答した場合を2点、「全くなかった」と回答した場合を1点とし、その評定値を行動の頻度を表す得点として使用した。子どもの年代ごとに算出した16の行動の評定値の平均と標準偏差を Table 3 に示す。

はじめに、天井効果あるいは床効果がみられた行動を確認しておく。まず、天井効果については、「7. 話しかける」「8. 視線を合わせる」の2つの行動で顕著であり、特に「7. 話しかける」はすべ

ての母親がすべての年代で「よくあった」と回答していた。これら二つの行動は、日本の母親では特にスキンシップにはあたらない、と判断していた母親が多かった（14名中8名）行動であり、また、実際のところ直接的な身体接触をとまなう行動でないが、コミュニケーションの基本的な手段であるがゆえに、天井効果がみられたものと考えられる。

次に、床効果に関しては、イタリアの母親で「15. 子どもが親にマッサージをする」「16. お風呂で背中を流してもらう」の平均評定値がどの年代でも1.5点を下回っており、床効果が顕著であった。これらの行動をとらない理由として母親からは、「子どもが親にマッサージをする習慣がない」、「お風呂で背中を流してもらう習慣がない」という理由が述べられていた。この二つの行動の評定値は日本の母親においてもそれほど高くはなかったが、これらの行動はイタリアの文化にはない行動であり、日本の母子に特徴的なものであると考えられる。

16の行動の中で、平均評定値が3点（時々あった）を上回った行動の数をみると、日本の母親では、0～5歳で13（1. 手を繋ぐ、2. 頭を撫でる、3. 添い寝をする、4. 頬ずりをする、5. キスをする、6. おんぶする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる、9. 抱っこする、12. 髪を結ぶ、13. 抱きしめる、14. 手遊びをする）、小学生で5（1. 手を繋ぐ、2. 頭を撫でる、3. 添い寝をする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる）、中学生で2（7. 話しかける、8. 視線を合わせる）、高校～現在で2（7. 話しかける、8. 視線を合わせる）と、0～5歳から小学生にかけてその数が大幅に減少していた。一方、イタリアの母親では、0～5歳で12（1. 手を繋ぐ、2. 頭を撫でる、3. 添い寝をする、4. 頬ずりをする、5. キスをする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる、9. 抱っこする、12. 髪を結ぶ、13. 抱きしめる、14. 手遊びをする）、小学生で7（1. 手を繋ぐ、2. 頭を撫でる、5. キスをする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる、12. 髪を結ぶ、13. 抱きしめる）、中学生で4（5. キスをする、7. 話しかける、8. 視線を合わせる、13. 抱きしめる）、高校～現在で4（5. キスをする、7. 話しかける、8. 視線を合わ

Table 3 16行動の頻度の評定値の基本統計量ならびに分散分析の結果

行動	日本 (N=14)					イタリア (N=14)					分散分析結果					
	0～5歳		小学生	中学生	高校～現在	0～5歳		小学生	中学生	高校～現在	国の主効果		年齢の主効果		交互作用	
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	F値	偏 η^2	F値	偏 η^2	F値	偏 η^2
1.手を繋ぐ	4.00 (0.00)	3.71 (.47)	1.86 (0.95)	1.50 (0.76)	1.50 (0.76)	3.79 (0.58)	3.57 (0.65)	2.64 (0.93)	2.00 (0.96)	2.00 (0.96)	1.39 ns	0.05	89.01 ***	0.77	4.87 **	0.16
2.頭を撫でる	3.93 (0.27)	3.43 (.51)	1.86 (0.77)	1.50 (0.65)	1.50 (0.65)	3.93 (0.27)	3.50 (0.65)	2.57 (0.85)	2.07 (0.83)	2.07 (0.83)	3.82 ns	0.13	109.77 ***	0.81	3.40 *	0.12
3.添い寝をする	4.00 (0.00)	3.14 (1.03)	1.29 (0.47)	1.21 (0.43)	1.21 (0.43)	3.57 (0.76)	2.86 (0.95)	1.93 (0.83)	1.43 (0.76)	1.43 (0.76)	0.03 ns	0.00	125.86 ***	0.83	5.56 *	0.18
4.頬ずりをする	3.5 (0.65)	2.36 (0.93)	1.21 (0.43)	1.14 (0.36)	1.14 (0.36)	3.14 (0.86)	2.43 (0.85)	1.64 (0.93)	1.36 (0.63)	1.36 (0.63)	0.17 ns	0.01	93.54 ***	0.78	2.81 ns	0.10
5.キスをする	3.14 (0.86)	1.93 (0.92)	1.14 (0.36)	1.21 (0.80)	1.21 (0.80)	4.00 (0.00)	3.71 (0.47)	3.14 (0.77)	3.00 (0.78)	3.00 (0.78)	65.32 ***	0.72	50.78 ***	0.66	6.93 ***	0.21
6.おんぶをする	3.07 (1.07)	1.86 (0.86)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	2.14 (0.95)	1.57 (0.76)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	3.54 ns	0.12	51.17 ***	0.66	4.21 *	0.14
7.話しかける	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)						
8.視線を合わせる	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	4.00 (0.00)	3.93 (0.27)	3.93 (0.27)	3.57 (0.65)	3.29 (0.99)	3.29 (0.99)						
9.抱っこする	4.00 (0.00)	2.64 (0.84)	1.29 (0.47)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	3.93 (0.27)	2.43 (0.76)	1.29 (0.47)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	0.39 ns	0.02	291.27 ***	0.92	0.41 ns	0.01
10.膝に乗せる	4.00 (0.00)	2.93 (0.83)	1.43 (0.76)	1.14 (0.36)	1.14 (0.36)	3.86 (0.36)	2.79 (0.97)	1.57 (0.76)	1.14 (0.36)	1.14 (0.36)	0.51 ns	0.00	178.44 ***	0.87	0.51 ns	0.02
11.腕を組む	2.43 (1.16)	2.71 (0.83)	2.00 (1.04)	1.93 (1.07)	1.93 (1.07)	1.64 (0.93)	1.93 (1.07)	2.36 (1.01)	2.71 (1.20)	2.71 (1.20)	0.13 ns	0.01	0.80 ns	0.03	6.92 ***	0.21
12.髪を結ぶ	3.00 (1.30)	2.36 (1.22)	1.71 (0.83)	1.21 (0.58)	1.21 (0.58)	3.07 (1.27)	3.07 (1.21)	2.21 (1.12)	1.57 (0.94)	1.57 (0.94)	1.43 ns	0.05	33.20 ***	0.56	1.01 ns	0.04
13.抱きしめる	3.86 (0.36)	2.79 (0.97)	1.71 (0.91)	1.64 (0.93)	1.64 (0.93)	3.93 (0.27)	3.79 (0.58)	3.29 (0.61)	3.00 (0.88)	3.00 (0.88)	20.51 ***	0.44	55.66 ***	0.68	11.53 ***	0.31
14.手遊びをする	3.86 (0.36)	2.43 (0.76)	1.29 (0.47)	1.07 (0.27)	1.07 (0.27)	3.07 (0.83)	2.36 (0.74)	1.64 (0.84)	1.36 (0.50)	1.36 (0.50)	0.09 ns	0.00	131.46 ***	0.84	8.61 ***	0.25
15.子どもが親にマッサージをする	2.00 (1.18)	2.21 (0.89)	2.07 (0.83)	1.93 (0.92)	1.93 (0.92)	1.50 (0.85)	1.50 (0.94)	1.36 (0.63)	1.50 (0.94)	1.50 (0.94)						
16.お風呂で背中を流してもらう	2.36 (1.08)	2.00 (0.96)	1.36 (0.63)	1.21 (0.58)	1.21 (0.58)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)	1.00 (0.00)						

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4 多重比較の結果

年代の主効果のみ 有意だった行動	多重比較		
4.頬ずりをする	①>②>③④		
9.抱っこする	①>②>③>④		
10.膝に乗せる	①>②>③>④		
12.髪を結ぶ	①>②>③>④		

交互作用が 有意だった行動	多重比較		国の差が有意 だった年代
	日本	イタリア	
1.手を繋ぐ	①②>③④	①②>③>④	③ イタリア>日本
2.頭を撫でる	①②>③④	①②>③④	③④ イタリア>日本
3.添い寝をする	①>②>③④	①>②>③④	③ イタリア>日本
5.キスをする	①>②>③④	①②>③④	①②③④ イタリア>日本
6.おんぶをする	①>②>③④	①>②③④	① 日本>イタリア
11.腕を組む	②>③④	①②<③④	①② 日本>イタリア ④ イタリア>日本
13.抱きしめる	①>②>③④	①②>③④	②③④ イタリア>日本
14.手遊びをする	①>②>③④	①>②>③④	① 日本>イタリア

注1：①は0～5歳，②は小学生，③は中学生，④は高校～現在。

注2：有意水準は，5%以下。

せる，13. 抱きしめる）と，日本の母親と同様に，0～5歳から小学生にかけてその数が大きく減少していた。

総じてみると，乳幼児期には日本の母親もイタリアの母親も様々な種類のスキンシップ行動を取っているが，小学生以降の年代になると，子どもに対して取るスキンシップ行動の種類が限られてくることが示唆された。特に，中学生以降の年代になると，日本の母親では直接的な身体接触をともなう行動で平均評定値が2（「まれにある」）を上回るものは「15. 子どもが親にマッサージをする」をのぞくと一つもなくなり，また，イタリアの母親でも，「5. キスをする」「13. 抱きしめる」の2つによくとられるスキンシップ行動が限定されていくことが明らかとなった。

子どもの加齢にともなうスキンシップ行動の頻

度の変化 子どもの加齢にともなう各行動の頻度の変化を調べるため，天井効果・床効果が顕著であった4つの行動（7. 話しかける，8. 視線を合わせる，15. 子どもが親にマッサージをする，16. お風呂で背中を流してもらう）をのぞく12の行動の平均評定値を従属変数，国と子どもの年代を独立変数とする，2（協力者間要因；日本・イタリア）×4（協力者内要因；0～5歳・小学生・中学生・高校～現在）の分散分析を行った。その結果をTable 3に示す。

12の行動の中で，国の主効果のみが有意であった行動はなかった。また，12の行動のうち，4つの行動（4. 頬ずりをする，9. 抱っこする，10. 膝に乗せる，12. 髪を結ぶ）では，年代の主効果のみが有意であった。残りの8つの行動（1. 手を繋ぐ，2. 頭を撫でる，3. 添い寝をする，

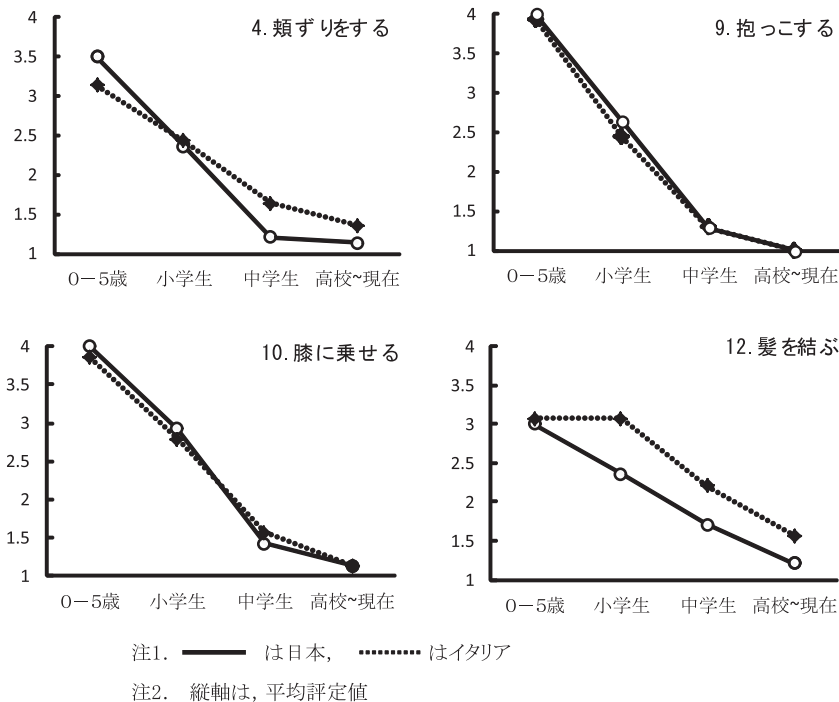


Figure 1 子どもの加齢ともなうスキンシップ行動の頻度の変化
(年代の主効果のみが有意だった行動)

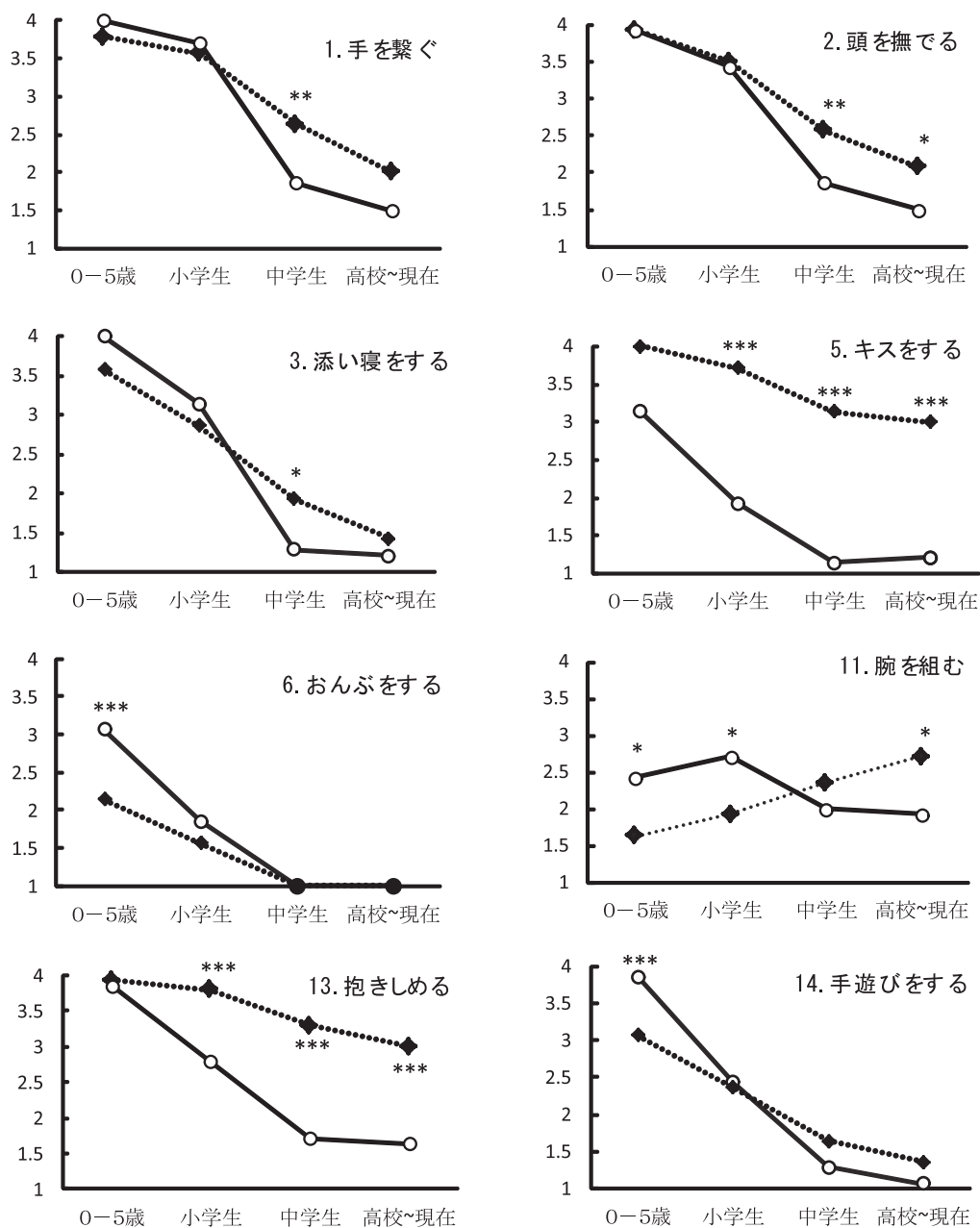
5. キスをする, 6. おんぶをする, 11. 腕を組む, 13. 抱きしめる, 14. 手遊びをする) では, 国と年代の交互作用が有意であった。年代の主効果のみが有意であった4つの行動については多重比較を, また, 交互作用が有意であった8つの行動については単純主効果検定と多重比較を行った。その結果を Table 4に示す。

まず, 年代の主効果のみが有意であった4つの行動 (4. 頬ずりをする, 9. 抱っこする, 10. 膝に乗せる, 12. 髪を結ぶ ; Figure 1 参照) については, すべての年代の間で有意差がみられ (ただし「4. 頬ずりをする」の中学生と高校~現在の年代間をのぞく), 子どもの加齢とともに徐々に頻度に低下が認められていた。「9. 抱っこする」「10. 膝に乗せる」については, 子どもの加齢とともに子どもの体格がよくなり, 体重も増加するため, これらの行動を取ることが物理的に困難になることが頻度の低下に関係していると推測される。また, 「12. 髪を結ぶ」については, 子ども

が幼いうちは独力ではうまく出来ないため母親の援助が必要であるが, 加齢とともに子どもが独力で出来るようになっていくことが, 頻度の低下に関係しているものと推測される。ただし, その他の理由や, 頬ずりの頻度に低下がみられた理由については, インタビューでの母親の語りの精査を通して改めて検討する必要がある。

次に, 交互作用が有意であった8つの行動について, Figure 2 と Table 3をもとに, 考察を行う。まず, 「1. 手を繋ぐ」行動は, 日本でもイタリアでも, 小学生と中学生の年代間で頻度が有意に低下していた。ただし, 中学生では, 日本の母親よりもイタリアの母親の方が, 子どもと手を繋ぐ頻度は有意に高く, Figure 2 からは, この年代間の頻度の低下の仕方は, イタリアでは相対的に緩やかであることが読み取れる。

「2. 頭を撫でる」行動については, 日本でもイタリアでも, 小学生と中学生の年代間で頻度に有意な低下が認められた。ただし, 中学生以降の年



注1. — は日本, はイタリア

注2. 縦軸は, 平均評定値

注2. アスタリスクは国の単純主効果が有意だった箇所, *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 2 子どもの加齢ともなうスキンシップ行動の頻度の変化
(国と子どもの年代の交互作用が有意だった行動)

代では、日本の母親よりもイタリアの母親の方が、子どもの頭を撫でる頻度は有意に高く、Figure 2からは、頻度の低下の仕方はイタリアでは相対的に緩やかであることが読み取れる。

「3. 添い寝をする」については、日本でもイタリアでも、0～5歳から小学生の年代間と、小学生から中学生の年代間で頻度に有意な低下が認められ、中学生までの間に徐々に頻度が低下していることが分かった。ただし、中学生では、日本の母親よりもイタリアの母親の方が子どもに添い寝をする頻度は有意に高く、Figure 2からは、日本の方が頻度の低下の仕方が急激であることが読み取れる。

「5. キスをする」については、日本の母親では0～5歳から小学生の間と、小学生から中学生の年代間で頻度に有意な低下が認められた。一方、イタリアの母親では、中学生から高校～現在の年代間で頻度に有意な低下が認められた。ただし、いずれの年代でも子どもにキスをする頻度は日本の母親よりもイタリアの母親の方が有意に高く、Figure 2からは、イタリアでは頻度の低下の仕方が緩やかであることが読み取れる。

「6. おんぶをする」については、日本でもイタリアでも、0～5歳から小学生の年代間で頻度に有意な低下が認められており、いずれの国でも中学生以降は、全員の母親がおんぶをすることはまったくないと回答していた。なお、0～5歳の年代では、子どもをおんぶする頻度は、イタリアの母親よりも日本の母親の方が有意に高かった。

「11. 腕を組む」については、日本では小学生から中学生の年代間に頻度に有意な低下が認められたのに対し、イタリアでは小学生から中学生の年代間に、頻度に有意な上昇が認められた。また、子どもと腕を組む頻度は、中学生をのぞくすべての年代で、日本の母親よりもイタリアの母親の方が高かった。このように、「腕を組む」行動については、日本とイタリアとは頻度の増減に対照的な変化が認められた。

「13. 抱きしめる」については、日本の母親では0～5歳から小学生の年代間と、小学生から中学生の年代間で頻度に有意な低下が認められた。一方、イタリアの母親では、中学生から高校～現

在の年代間で、頻度に有意な低下が認められた。ただし、子どもを抱きしめる頻度は、小学生以上のいずれの年代においても、日本の母親よりイタリアの母親の方が有意に高く、Figure 2からはイタリアでは頻度の低下の仕方が緩やかであることが読み取れる。

最後に、「14. 手遊びをする」については、日本でもイタリアでも、0～5歳から小学生の年代間と、小学生から中学生の年代間で頻度に有意な低下が認められ、乳幼児期から中学生にかけて徐々に頻度が低下していることが分かった。ただし、0～5歳では、イタリアの母親よりも日本の母親の方が子どもと手遊びする頻度は有意に高く、その分、頻度の低下の仕方が急激であることがFigure 2からは読み取れる。

子どもの加齢にともなうスキンシップ行動の頻度の変化に関する結果の総括 分析の結果、スキンシップ行動の頻度の変化の仕方はいくつかのパターンがあり、国によらず共通した変化のパターンがみられる行動があることや、国によって変化のパターンに違いがみられる行動があることが分かった。また、変化のパターンとしては類似しているものの、頻度に低下がみられるタイミング（年代）や頻度の低下の幅が国によって異なる行動があることも分かった。主にFigure 1, Figure 2にある折れ線グラフの形に着目しながら、以下に結果の総括を記す。

国によって変化のパターンに大きな違いがみられたのは、「11. 腕を組む」という行動である。子どもと腕を組む行動については、日本では子どもの加齢とともに頻度が低下していたのに対して、イタリアでは頻度が上昇しており、対照的な変化のパターンをなしていた。また、腕を組む行動は、イタリアに関してのみであるが、今回の調査で扱った行動の中では唯一、加齢にともなう頻度の上昇が認められた行動である。イタリアにおいてもその他の行動はすべて加齢に伴い頻度が低下していたことから、子どもと腕を組む行動は、親愛の情を示す行動として、他の行動に代わって取られるようになるのかもしれない。また、腕を組む行動は、日本においても、直接的な接触をとる行動の中では頻度の平均評定値がもっとも

高かったことから、今回扱った行動の中では心理的な抵抗が少ない行動であるのかもしれない。

「11. 腕を組む」以外の、直接的な接触をとまなう行動についてはすべて、いずれの国でも子どもの加齢にともないその頻度に低下が認められた。その中でも一部の行動については、国によらず、乳幼児期（0～5歳）から中学生までの年代をかけて一気に低下し、中学生以降の年代にはほとんど見られなくなる、という変化のパターンがみられた。これに該当するのが、「4. 頬ずりをする」「9. 抱っこする」「10. 膝に乗せる」といった行動である。また、「3. 添い寝をする」も、類似した変化のパターンがみられた行動であるといえる。

「6. おんぶする」「14. 手遊びをする」についても、上述のパターンと同様の変化がみられたが、この二つの行動の頻度は、乳幼児期（0～5歳）にはイタリアの母親よりも日本の母親で高かったため、日本の母親においては頻度の低下の幅も大きかったといえる。

「1. 手を繋ぐ」「2. 頭を撫でる」「5. キスをする」「13. 抱きしめる」については、乳幼児期（0～5歳）には日本の母親とイタリアの母親とで頻度に差がなかったものの、頻度が低下していく過程で、小学生以降のある年代から両者の間に差がみられるようになった行動である。いずれの行動も、日本の母親では高校以降の年代ではほとんど取られなくなっていたが、イタリアの母親では一定の頻度で取られており（いずれも平均評定値は2点以上）、イタリアでは頻度の低下の仕方が日本よりも緩やかであった。特に、「5. キスをする」「13. 抱きしめる」といった行動は、イタリアでは高校生以降の年代の子どもに対しても多く取られており、イタリア人にとっては年代を問わず、情愛を示す重要な手段であることがうかがわれた。

以上より、日本の親子のスキンシップ（身体接触）に関する特徴として、先行研究では、乳幼児期には親密さの高い身体接触が行われているが、児童期以降に急激に減少する（バーンランド、1979；Gregory, 2011）ことや、青年期以降に家族間での身体接触量が減少する（土蔵、1988）ことが指摘されてきた。しかし、本研究の結果から

は、頻度の減少のパターンは行動によって異なっており、一様ではないことが示された。ただし、子どもが高校生以上の年代になると、キスをする、抱きしめる、腕を組むといった形で身体接触が維持されているイタリアの母子とは対照的に、日本の母子の間では身体接触がほとんどなくなることが明らかとなった。

子どもの加齢にともなうスキンシップ行動には、物理的理由（子どもの体格や体重の変化）からその頻度に変化がもたらされるもの（たとえばおんぶや抱っこ、膝に乗せるなど）もあると考えられるが、スキンシップ行動の量やその変化には、文化の中で培われ、伝承されてきた、スキンシップに対する考え方やスキンシップにともなう感情、さらには、子どもの発達ならびに親子関係についての考えが大きく関わっているものと推察される。本論文では研究の第一報として、量的観点から母子間のスキンシップ行動の発達的变化を検討したが、続報では、本論文では扱えなかった、量的変化の背景にある母親の考えや感情を、質的観点から掘り下げて検討する予定である。

脚注

本論文は、第二著者（関エレナ）が2017年度卒業研究Ⅰのレポートとして提出したものを、第一著者（坂上）が協力者の承諾を得たうえでデータを再分析し、加筆修正を行ったものです。調査にご協力下さった方々のご厚意に感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum, 1978
- バーンランド, D.C. (1979) 西山千・佐野雅子 訳 日本人の表現構造—公的自己と私的自己・アメリカ人との比較. 東京: サイマル出版会. (Barnlund, D. C. *Public and Private Self in Japan and the United States.*)
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.

- Caudill, W., & Weinstein, H. (1969). Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-43.
- Feldman, R., Gordon, I. & Zagoory-Sharon, O. 2010 The cross-generation transmission of oxytocin in humans, *Hormones and Behavior*, 58, 669-676.
- Gregory, C. (2011). Skinship: Touchability as a virtue in east-central India. *HAU: Journal of Ethnographic Theory*, 1 (1), 179-209.
- Harlow, H.F. (1963). The nature of love. *American Psychologist*, 13, 673-685.
- 自由国民社 (1958). 現代用語の基礎知識.
- 自由国民社 (1972). 現代用語の基礎知識.
- 自由国民社 (1982). 現代用語の基礎知識.
- 鍋倉健悦 (2009). 異文化間コミュニケーション入門 丸善ライブラリー.
- 柴崎正行 (1998). 江戸時代における子どもの発達観と育児方法について 東京家政大学博物館紀要, 3, 41-51.
- 佐野良五郎・荻野七重 (1990). 母子交流に関する研究—スキンシップについて (1)— 白梅学園短期大学紀要, 26, 29-35.
- 小学館 日本大百科全書 (ニッポニカ) デジタル版 <https://kotobank.jp/word/スキンシップ> -302011 (2022年1月6日閲覧)
- Tahhan, D.A. (2010) Blurring the boundaries between bodies: Skinship and bodily intimacy in Japan. *Japanese Studies*, 30:2, 215-230.
- 高田みなみ・長江 美代子 (2012). 非接触文化である日本の看護臨床場面においてタッチングが有効に働く要因: 統合的文献研究 日本赤十字豊田看護大学紀要, 7(1), 121-131.
- 田中良子 (1997). スキンシップ概念の検討: 和製英語の導入と定着 高松大学紀要, 27, 502-516.
- 土蔵愛子 (1998). 家族・社会生活におけるタッチ—性差, 年齢, 性格, 家族構成との関連—. 看護展望, 23(8), 76-84.
- 山口 創 (2003). 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響 健康心理学研究, 16(2), 60-67.